もっと恥多き行く手に

志茂田景樹

今の自分の原点はどこにあるのだろう、とふと考えることがある。講演活動、読み聞かせ活動を全国で展開しており、その回数は年間八十回前後なので、時間的にはいちばん負担が大きい。

読み聞かせ活動とほぼ同時期に始めた絵本、児童書の刊行も四十冊に達しており、二〇一四年には第十九回日本絵本賞読者賞を頂いている。近年は自己啓発書の執筆にも力を入れており、今年も二冊の出版が予定されている。

たまにテレビ、ラジオに出演し、サブカル系、アングラ系のライブハウスをよく覗く人はご存知かもしれないが、二年前からゴルラップと称する自己流のラップをひっさげてライブ活動も行っている。

年齢を重ねても好奇心は衰えず、興味を強くそそられれば手を出さずにいられない。悪癖とも性とも言える気儘な行動が今の僕を築いたということならそれでよしとするしかないが、この流れを遡ると糟糠の妻の日記の一行に突き当たる。

大学を卒業後、僕は転職を繰り返していたが、洗車ブラシのメーカーに勤めたとき、高校新卒入社の妻と出会った。僕は半年余りで退社したが、それと相前後して妻と同棲を始めた。共に早生まれで、僕二十六歳、妻十八歳だった。風呂も

ない四畳半一間の暮らしだったが、新鮮で刺激に充ちていた。

家具は二人で秋葉原の電気店へ買いにいった中古の白黒テレビと、脚を折り畳める丸いちゃぶ台ぐらいで、妻は鍋釜一丁ずつでも楽しそうに料理を作った。丸いちゃぶ台は僕が都下武蔵野市の実家を黙って出るときにキッチンから持ちだしたものだった。持ちだした理由の一つは、ちゃんと自活するためだから心配しないでいいよ、というサインだったが、両親は理解できただろうか。

僕の転職癖は変わらず、次の職場が決まるまでは端境期のようなもので、しばらく部屋でゴロゴロすることになる。ガランとした部屋の隅には常に数冊の小説本が投げだされていたが、みな妻が通勤の行き帰りに読んだものばかりであった。

きちんと整理もせず捨てもせず放置されていたのは、僕に読めという暗黙の勧めで、妻は僕にそういうほうの資質を見ていたらしい。でも、僕は一顧もせず、畳に寝転びながらよく読んだのは「天才バカボン」の連載が始まった『週刊少年マガジン』だった。ときに部屋にけたたましく響く自分の笑声にギョッとすることがあった。

妻は数ヶ月単位で転職を繰り返す僕に、内心では強く不安を覚えだしたようで、些細なことで口調を尖らすことがあった。その内心を察してはいたが、相変わらず僕は呑気に無責任で、一緒に公衆風呂からガランとした部屋に戻って、

「今は何にも見えないけどさ、ここには僕らの宝がいっぱい埋まっているんだよ」

と、甘っちょろいセリフを吐いて妻をしらけさせた。

ある日、押し入れで探しものをしていて、大学ノートに書かれた妻の日記を見つけた。ペラペラめくって拾い読みをしたが、ある一行の記述に僕の視線は釘づけになった。

忠男（僕の本名）はもう駄目かもしれない。

この時期は保険の調査員をやっていた。月の三分の二は全国各地へ出張する仕事だったから風来坊気質で、好奇心の強い僕には向いていたようだった。ただ、移動時間がやたら長く、その時間を潰すのに週刊誌や、漫画誌に読みふけっていた。

それが妻の日記を盗み読みしてから小説本や、文芸誌に変わった。小学三、四年頃から、父の蔵書の文学全集に読みふけるなど、読書的にはませた子供だったが、高校、大学時代は映画にはまり、読書傾向は文芸書から離れていた。

社会に出てからは映画熱も冷め、読書にはもっといい加減になっていたが、突然変異のように移動時間中に猛然と貪欲に文芸ものの活字を追うようになったのである。文芸誌には新人賞受賞作が載る月号があって、どれどれと読みふけり、このぐらいのものならいつでも書けると思いこむようになった。

それは明確な作家志望の始まりだった。その頃、不意に父が部屋に訪れ、同棲生活がばれた。それまで二、三ヶ月に一

回ぐらい赤電話から母に電話を入れ、お父さん、変わりない？　僕は元気だよ。また電話かけるね……と様子伺いをしていた。住所は番地を違えて教えてあった。

父は僕の写真を持ち、その虚偽の番地付近で聞きこみを行い、僕らの部屋を突きとめたのである。

親同士が連絡を取りあい、急遽、僕らを結婚させることになった。あと旬日で二十八歳を終えるときだった。

その年の初夏、出張を終え夜行列車で北陸から上野へ向かっているとき、左腹にシクシク激痛が始まった。しばらく前にも経験した痛みで、そのときは酒を飲み始めるとおさまった。しかし、このときの激痛は断続しながらおさまらず、夜、部屋で七転八倒の痛みの末、救急車で近くの街病院へ搬送された。腹膜炎を併発した重症の虫垂炎で、手術後も四十度前後の高熱が引かず、数日間、死線をさまよった。

熱が引いても大事をとったほうがいいと言って院長はなかなか退院の許しをくれなかった。妻が原稿用紙と筆記具を持ってきて、黙ってテーブルに置いていった。僕は病室で初めて小説を書いた。その小説を「オール讀物新人賞」に送ったところ、二次予選までいった。

あれで二次予選か、じゃ三年もやれば貰えるな、と自信を深めた僕は仕事のほうも業界紙記者、週刊誌取材記者、週刊誌、月刊誌のアンカーライターといったように、徐々に作家の世界に近づけていった。

ただ、受賞の期限を三年と決めたのは僕の認識の甘さで、三年経った頃から候補作の常連にはなったものの、いつも受賞を逸していた。これで決まりだ、と自分で太鼓判を押した作品が通らなかったときはさすがに落ち込んだ。妻のお腹には二人目の子供が宿っていた。

懸賞小説の応募をやめて、ライターとしての仕事を増やせば親子四人の生活には充分なものが得られる。妻もそれを望んでいるだろう。断念を視野に入れた。でも、胸の内に燃える作家になるという執念の炎は小さくなっても鎮まる気配はない。

いつも生活のための原稿を書き終えると、応募のための原稿用紙に置き換えてペンを握った。しかし、いつも数行も書くと筆が止まった。僕は厚い壁に直面していたのである。やはり、断念か、と深夜に原稿用紙に×を書き連ねた。忠男はもう駄目かもしれない、という妻の日記の一行が浮かんだ。

ある深夜、妻がトレイに紅茶と小ぶりのケーキを乗せて入ってきた。

「僕、もうやめようかと思うんだ」

心にもない言葉だったが、妻が賛成すれば未練なく執念の炎を消す覚悟でいた。

「私は反対だわ。生活のほうは何とかなるから続けてほしいの」

その妻の言葉には作家への道に立ちはだかった厚い壁を破砕する力がこもっていた。

心機一転して書いた作品はストーリーテリングをあえて意識せず、登場人物を活写することのみに注力した。その作品「やっとこ探偵」が第二十七回小説現代新人賞を受賞した。

直木賞は向田邦子さんと同時受賞だった

二十九歳で初応募し、三十六歳の受賞まで七年かかった。七年の苦労が後になって生きてきたのか、作家専業になるまでに一年もかからなかった。ヒットのシリーズを複数抱えての小説現代新人賞受賞四年目の夏、「黄色い牙」で直木賞を頂いた。四十歳になっていた。

それからいろいろなことがあった。私生活が乱れ、久しく家に帰らなかったこともある。いい気になっていた。でも、その自分を悲しいと思った。

酔い覚ましに夜更けの目黒通りを歩き、ふらりと入りこんだ小公園で振り仰いだ星空の美しさに、

「おおい、同じ地球の上にいるんだぞー！」

と、ハラハラ涙を流し叫んだことがある。

無論、その叫びは妻には届かなかったろう。

昨年、「火花」の又吉直樹さんが受賞者の一人となった芥川賞直木賞受賞記念パーティーに参加した。少し上気した又吉さんの顔を見ながら、この人はこれからの三十五年をどのように送ることになるのだろうか、とふっと考えた。この人は僕が直木賞を貰った年に生を享けている。興味をそそられたが、それは又吉さん本人にも解らないことだろう。

僕は自分の行く手を見た。過去にはこだわらない性ゆえに、どう転ぶか解らない行く手だった。

ただ、今までよりも恥多き行く手にしたいと思っている。